

教育学・心理学

key word

- 社会調査
- アンケート調査
- インタビュー調査
- 統計分析
- データサイエンス



太田 拓紀
Hiroki Ota

教育学部
教授

【専門分野】

・教育社会学・教師教育論

【略歴】

・早稲田大学教育学部 卒業
・京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 学修認定退学
・博士(教育学)
・玉川大学助教・准教授、滋賀大学准教授を経て現職

【資格】

・専門社会調査士

【学会活動】

日本教育社会学会
日本教師教育学会
(年報編集委員 2020-23)
日本教育学会
日本子ども社会学会
(紀要編集委員 2025-27)

【主な委員】

学ぶ力向上滋賀プラン検討協議会 委員(2018-19)
学ぶ力向上滋賀プラン検討協議会 副会長(2023-24)

【主な著書・論文】

『「だれが教師をめざすのか」の教育社会学』学文社、2025年。
『近代日本の私学と教員養成』学事出版、2015年。
「昭和初期中学校における学校紛擾の社会的・文化的背景」『子ども社会研究』第29号、2023年。

【代表的な研究テーマ】

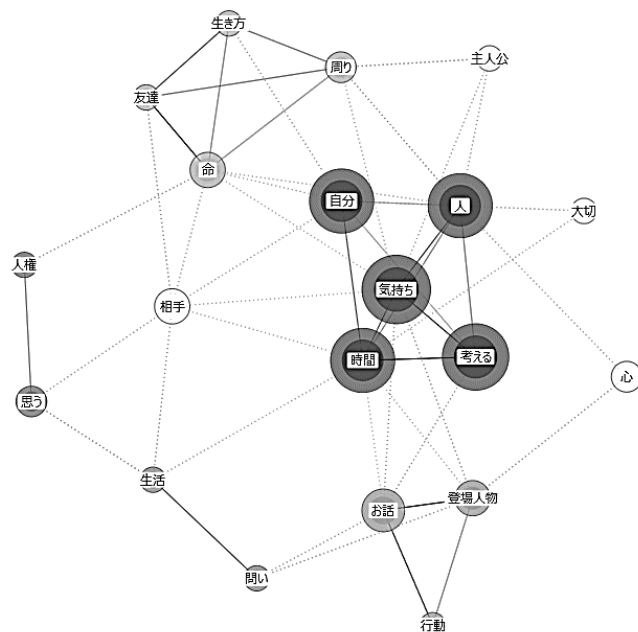
□ 教育領域における社会調査とデータ分析

課題解決に役立つシーズの説明

【1】教育領域における社会調査と統計分析

これまで教育領域において、さまざまな社会調査と統計分析を実施してきました。生徒・学生対象のアンケート調査やインタビュー調査はもちろんのこと、日記や議事録などの一次資料を用いた質的調査、教職員名簿をデータベース化した上でのデータ分析など、調査方法と分析手法は多岐にわたっています。また、一見、データ(数値)による分析には向かないと思われる資料も、現在では比較的容易に量的な検証が可能になっており、積極的に活用しています。例えば、児童の感想や意見などの文章も、テキストマイニングの手法によれば、言葉の出現頻度や共起関係(出現する言葉と言葉の関連のパターン)を図示でき、全体の感想・意見の構造が一目でつかめます(右図)。

現実を正しく理解するために調査と分析を行うわけですが、社会調査の考えにもとづくと、実に多様な素材が分析対象になるわけです。そのために、資料を数値化できないか、ということをよく考えます。そもそも質問紙調査の選択肢も数値があてがわれますが、意識や行動を視覚化し把握しやすくするしかけといえます。社会調査と統計分析を理解することで、子どもや学校のリアルを正確に把握でき、学校の運営や授業の実践にも大いに生かせるのではと考えています。



図：「道とくの時間は、何を考える時間だと思いますか」抽出語の共起関係(北沢和也・太田拓紀・三輪貴美枝、2023、「道徳授業における『ふりかえりシート』の実践と効果」『滋賀大学教育実践研究論集』第5号、p.100)

【2】学力調査データの分析

とりわけ近年では、自治体からの依頼を受け、大規模な学力調査の分析を実施してきました。学力調査の分析では「どのような子どもが高い学力を示すのか」に関心が集中します。ただし、子どもの学力に対しては、さまざまな要因が考えられます。例えば、家庭での経済的・文化的背景です。経済的に恵まれた家庭の子どもは、教育費を投入でき、学力が高くなると予想できます。次に、子ども個人の努力です。本人の努力のあらわれである勉強時間は、やはり学力に影響を及ぼすと考えられます。さらに、学校の授業です。質の高い先生によるわかりやすい授業は、学力向上に貢献するでしょう。

このように、一つの結果(学力)に対し、原因(家庭・本人・学校)が複数想定されるときなど、多変量解析が役に立ちます。分析を実施すると、どの原因が最も影響が強いのか(あるいは影響が弱い)が判明します。実は、教育をはじめ、さまざまな社会現象は、1対1の因果関係では把握しきれないことが大半です。学力調査のデータに対し、さまざまな分析手法を用いることで、学力に関わる多様な関係性やその背景があきらかになってきます。

企業・自治体へのメッセージ

- ・学校教育におけるさまざまな調査とデータ分析に関して、共同研究を希望します。
- ・自治体から学力調査分析の委託をうけ、分析を実施し、結果をフィードバックしています。
- ・学校単位の教育調査・データ分析について関心があります。学校では、児童生徒・保護者に対する調査のニーズが高まっています。質問紙の設計やデータの収集・分析方法について助言できます。